

顔の探求 — シャロット異聞 —

加藤龍彦

世界を映す論理という名の鏡

— ヴェイトゲンシュタイン

And moving through a mirror clear
That hangs before her all the year,
Shadows of the world appear.

— Alfred Tennyson "The Lady Of Shalott"

た。また、様々な身体的変化を被ることもなかった。その意味において、彼女は確かに人間とは異なるなにか、であり、人間とは異なる時間を生きているのに相違なかった。また、彼女には過去がなかった。自らの数奇な境遇に関して、何も知らず、何も考えることはなかった。ただ目前の、蒼穹のように澄み渡った鏡面が、彼女を惹きつけた。

彼女の機織り機の前には、鏡が懸かっていた。その鏡に映る自らの顔を、彼女は織った。そこには彼女の想像が様々に加わり、配色上の工夫がなされ、細部には様々に手が加えられた。彼女の目的は、鏡に映る姿そのものを写しとることではなかった。確かに彼女は、世に自らの姿程美しいものはない、と信じて疑わなかった。しかしまた、こうも思われた。それでもまだ、改善の余地がないわけではない。完全な美しさには、遠く隔たっている、と。もちろん、彼女が完全性の明確な基準を持っていたわけではなかったが、そこに何か欠落がある、という痛切な意識が、彼女を突き動かした。その欠落の感覚は、耐え難いものであった。日夜、完全ではないという不安が、彼女を苛んだ。しかし、織れども織れども、その感覚は彼女を苛み続けた。ジグソーパズルの、最後のピースが見つからない。そのピースが欠けているが故に、パズルは永遠に完成しない。ピースはどこに行ったのだろう。考えつく場所は全て当たった。すると、何かの拍子に――。悲しみが募ると、彼女は歌った。過去のない彼女に唯一残されたものは、この歌であった。その言葉は、明らかに当時の英語とは異なる、奇妙な、しかし流麗な調子を持つ

ていた。意味は推測すべくもなかったが、歌は聴く者を惹きつけた。部屋にある唯一の窓から、キィ：パタンの音と共に、調べは飛び立って麦畑を、川面を、大道を駆けた。そして、彼方に霞むカメラロットの歓楽の内に、消えて行った。こうして、常にシャロットは一人残されて、自らの顔と向き合い続けるのだった。

III

絶対的に純粹な鏡から永久的に脱却するまで、

∴その固い線を空気の欠如のなかに投げ出し、

最後の努力のうちに凍結して、孤立した峻厳な姿で死んでしまうまで、そうしてやがてカーテンも不安定な状態をやめ、永遠に保つべき姿勢でおろされるまで。

——マラルメ

それは、唐突な訪れであった。麦畑では収穫も終わり、季節は冬に近づいていた。一面の畑も今は狩り尽くされ、その周辺を囲むようにして広がる林の葉も、そのほとんどが枯れ落ちていた。その景色は、荒涼としたものであった。シャロットの生活は変わらなかった。機を織る手は休みなく、自動機械のように動き続けた。その男が現れたのは、そんな時であった。

*

男は馬を走らせていた。というよりも、走る馬にしがみついているといった有様であった。その目は充血し、鼻息は馬のそれと共に荒く、身に纏った鎧は軋みを上げていた。寒風が、疲弊し、傷ついた身体に染み込んだ。後ろを振り向くと、黒々とした闇夜が、すべてを包み込んでいた。男は遠く、茫洋として、しかし確かに灯るキャメロットの灯火を見た。我が主を想った。また仲間の騎士たちを。そして、王妃を。そうした想いは、彼の生への意思を燃え立たせたが、また、そこには決して戻ることはないだろうと思うと、絶望の念も深まった。再び後ろを振り向いた。相変わらず、そこには物言わぬ夜が口を開いているばかりであった。

その時だった。林中で何ものか蠢く音がして、二つ、三つ騎馬が飛び出してきた。馬は嘶きを上げて、一層速度を上げた。この上の逃走が無意味であることは、一見して明らかであった。男は瞬間逡巡した。何とか逃げ切る道はないものか。いや、これ以上醜態を晒す要はない。例え無謀であろうと、戦に尽きるが騎士の本分。：そう思うが早いか、男は手綱を取り直し、馬を騎馬の方へと向けようとした。しかし意外に、馬は男を振り落さんばかりの力で方向を変えて、川がある方へと突進した。男がなにをしようとして無駄であった。まるで憑かれたかのように、駿馬は駆けつけた。男は不思議に思っただけで、瞬我にかえり、馬の行く先に目を凝らした。すると、川向うの中洲に黒々とした、巨人のように聳え立つものが、木間から覗いて見えた。そしてそれとともに、甘美な、しかし悲哀に満ちた歌声が、かすかに響いているのに気づいた。途端、男は想起した。塔に住む、人ならざるものの噂。シャロットという名前。不可思議な言葉の歌、機織りの音。：。「すると、」男は思った。「この呪文のような歌声が、こいつを狂ったようにしているのか。」男はそこまで考えたが、それも役に立ちそうにはなかった。というのも、馬はすでに川の目前に達して、飛び込もうと身構えているところであったから。「いずれにせよ、なるようになる。」男は腹を決めた。

破裂音とともに、飛沫が散った。川に飛び込んだのだった。馬は濡れるも構わず、懸命に泳いだ。泳いで泳いで岸に着くと、途端おとなしくなって、身を幾度もも振るって

水をはねた。歌は止んでいた。見ると追手は川の前で立往生しているようだった。男は好機とばかり馬から降りると、傷ついた体を引きずって塔の門へと向かった。「噂がどうであれ、ここは潜むのには最適だ。」男は考えた。「このまま逃げてもカメラロットまで保もたうはずがない。しばらくここに隠れ、出直すか。」

男は、蒼枯たる正門に設置された出入り用の扉から中に入った。中庭のようだった。しかし、春にはとりどりの花が咲くであろう花園も、大方は寒風に打ちのめされていた。ただ少数のものたちが、忍耐強く咲いていた。

キイ…パタン。キイ…パタン。キイ…パタン…

突然に、機織る音が聞こえてきた。それは、どこからというでもなく響いてきて、風が溜め息をつくように、中庭を経巡った。「噂通りだな。」男は思った。「だが、音の主を知る者はない……。いずれにせよ、妙な噂はありがたい。奴らも簡単に近づこうとは思うまい。それに、これだけ塔があるなら…。」

男は、自らの左手前の塔に向かって歩き出した。ふと見上げると、月が調度中天に懸かろうという頃だった。「今日は、まともに眠る場所がある。」男は、低く呟いた。

*

鏡面が震えた。少なくとも、シャロットにはそう感じられた。彼女は機織りの手を止めて、鏡を見つめた。美しい顔がある。それを映す鏡と同様に、一点の曇りもない透き通った肌、黒檀のような黒髪、鋭い口許まなじりと嘸まなじり。いつも通りだ。もう長きに渡って向かい続けてきた顔…。それにしても、何て不完全なんだろう！目の位置は後五ミリ下、眉毛はもう少し釣り上がっていた方がいいし、頬はもう少し引っ込んでいた方が…。でも、直すことはできない。…だから、せめて私の本当の顔を、完全な顔を、作品としてだけでも残せたなら。完全な調和、安らい。永遠の美…。どんな芸術も、この顔には匹敵しない。ええ、決して…

シャロットは呆然として、あらぬ所を見つめていた。再び、鏡面が震えた。シャロットは我に返ると、恐る恐る鏡に手を触れた。水晶のような手が、鏡面に映り込んだ。一際激しく、鏡面は波を立てた。

*

男は、一步、一步と階段を登っていた。螺旋の塔はとぐろを巻きつつ、無限に伸びているかのようなだった。男は、追手を考慮してなるだけ上の部屋まで到達したいと考えて

いた。しかし、自身の消耗がそれを許さないことは明白だった。身にまとった鎧は、歩を進める度に重量をますようであった。限界が近かった。それほど登ってきたとも思われなかったが、今日のところは次の部屋で諦めざるを得ないように思われた。壁で身体を支えつつ、足を引きずるようにして目標の部屋に到達した。機織りの音は止んでいた。

男は倒れこむようにして内に入った。いや、文字通り倒れこんだ。そして、薄れゆく意識の中で、愛するギニヴィアの姿を認めたように、思った。

*

キイ：パタン。キイ：パタン。キイ：パタン。：

あの歌。何処か、見知らぬ国の言葉、ダイヤモンドの硬質と繊細さを併せ持った歌声。：。厳しく、また、甘美。一体この歌声は、誰のものなのだろう。：

夢半ばの意識の中で、男は考えていた。歌声：そして、機織る音：。

陽光が、眼を突き刺した。男は跳ね起きようとしたが、体が重石でも乗っているかのように重い。鎧であった。男は統いて、状況を認識しようとして顔を左右に動かした。どうやら、寝台に寝ているようだった。そして：横には機を降りつつ歌う、女の姿があった。完全な覚醒には遠かったが、男は最大限思考を巡らそうとした。「この歌声に、機織り。

ということはこの女が：。だが何故だ。多くの人々が訪れたと聞いたが：。いやそれより、こんな場所に一人で住んでいるのか。昼夜を問わず機を織りながら。それにこの歌、言葉：。」男の脳裏では疑問が奔出していたが、なんとかそれらを留め、起き上がった。女の方も気づいたようだった。彼女は機を織る手を止めて、男の方に向き直った。男は、驚きを隠せなかった。これが果たして、人間の姿だろうか。髪は、美しいが伸びざらばえ、眼は落ち窪み、唇は褪せて、乾ききっているようだった。ただ、肌は輝かんばかりに白く、その手には異様なまでの繊細さがあった。まるで部屋から出ていないのだろうか。：しかし男は、恩人に無礼を働けば騎士道の名が泣く、とばかり平静を保って、重々しく言った。

「まずは、礼を言わせて頂きたい。本来であれば、騎士がご婦人の御手を煩わせるなどと言語道断の所。力不足を恥じ、また貴君の寛大な処置に重ねて御礼を申し上げる。」

女は——推測できる限りでは——微笑んで、何か言葉を発した。少なくとも、それが言葉であることは確かであった。しかし、それはあの歌の言語同様、どこか聞くものを遠くへ運んでいくような、不可思議な調をもった言語で、男には聞き覚えのないものであった。しかし、どうやら男の言葉は通じているようだった。騎士は続けた。

「それで、ご相談なのだが、手助けついでと思つて、どうかこの塔の一室を、どこでも構わない、二、三日貸してもらえないだろうか。というのも、私は賊の一団に奇襲を

受けて、追われている最中なのだ。何、傷と体力さえ回復すれば大丈夫だ。すぐに出てゆこう。どうだろうか。」

女は再び微笑んで、頷いたようだった。男は安堵して言った。

「ありがとう。私はキャメロットのアーサー王に伺候する円卓の騎士の一人、サー・ランスロットという。貴方のお名前を……といっても、私には分からないが。」

女は少し顔を曇らせたようだった。そして何事か呟いた。ランスロットには理解すべくもなかったが。彼は質問を変えることにした。

「ところで、貴方はここに一人で住んでいるのだろうか。女性一人では、何とも不便な場所と見受けられるが……。」

女は微かに首を振った。ランスロットには、それが肯定なのか否定なのか決しかねた。女は機織り機の前に戻って、機織りを始めた。彼は、質問の選択がまずかったことを感じざるを得なかった。

「いや、すまなかった。悪意があったわけではないのです。少し奇妙に思われたものですから……。では、失礼しましょう。」

ランスロットはそう言うのと、立ち上がった。ふ、と部屋を見回すと、至る処に、女性の顔の織り込まれた織物が懸けられている。全て、同じ顔を写したもののようだった。微妙な変化はあったが、どれも精巧に織り込まれ、細部に至るまで、苦心の後が見られ

た。そしてその顔は、この世のものとは思われない静謐さを湛えて、眼を一点に据えていた。柔和かつ強靱、優美かつ気高い。その眼を見つめると、ランスロットほどの騎士でさえ、射すくめられたような感覚を覚えた。それは、精神性の一つの極致を示していた。女は、日夜これを織っているのだと、ランスロットは直感した。「深い森や、峨々たる山に住む隠者たちの中に、こうした顔をした人々がいた。……しかし、それでも、これ程の美しさを持つものはなかった。この女は何を……。」ランスロットはもの思いに耽りつつ、部屋をでた。戸を閉める時に振り返ると、鏡には、あのおぞましい女の姿があった。

*

ランスロットが出ていった後、シャロットは、虚を見つめていた。彼女にとって、これは初めての来客だった。そして、客は何か未知の感覚を、彼女の内に残していった。こんなことはついぞなかった。ただ機織りと美の追求のみが、彼女を支え、生かしてきた。しかし今、まるで異なったものが、彼女の心中を乱していた。一人の男の姿だった。彼はランスロットと名乗った。そして、その陰影をともなった話し方や容姿でもって、否応なく彼女を惹きつけた。キャメロットの騎士……キャメロットの……シャロッ

トは、今遠く朝靄に霞んでいる城のことを想った。ランスロットの槍試合で華々しく活躍する姿が、目に浮かぶようだった。空想はランスロットを起点として、様々に広がった。ふと、天井に懸ったあの顔の一つが目に入った。「ああ、私があれば程の美しさを持っていたなら……あの方も、否が応にも振り向こうものを……」彼女は思った。詮なき願であることは、彼女が最も承知していた。すると、一体自分は何をしてきたのか、という思いがシャロットの内に沸き上がってきた。こんなもの百も二百も織ったところで、一体何になるだろう。……詮、空想の産物でしかない。いくら美しい顔が織れたところで、あの方の気を引くには。……宮廷の華麗な女たちの向こうを張るには、まるで役立たず。

続いてシャロットは、鏡中を覗きこんだ。瞬間、ランスロットの姿が映りこんで、彼女を見つめたように思われた。一度でも、現実のあの人がある風に見つめてくださったら……。そう思わずにはいられなかった。しかし次の瞬間には、そこには自身の姿があった。私の織る顔に比べて、私の顔は余りに不完全だ。……これで、どうしてあの方の気を引くことができよう。……シャロットは殆ど、絶望しかけていた。再びあの顔を見た。その突き刺すような、澄明な瞳が胸に突き刺さるようだった。羨望は、憎しみに変わろうとしていた。心臓を、締め付けるような痛みが襲った。彼女は呻いた。そして、鏡の顔と織物の顔を交互に睨みつけた。いまや、あの顔だけはなく、自らの顔までが

憎しみの対象となっていた。そのような辛苦の内に、日は過ぎていった。

ランスロットが来て、三日目のことだった。あれ以来、ランスロットはシャロットの部屋に来ていなかった。シャロットに至っては、昼夜茫然自失の状態で、ただ寝台に顔をうずめて、鏡も織物も見ずに済むようにしていた。時折、今は森閑とした塔の内に、ランスロットが階段を降りてゆく音が反響した。何をしに行くのだろう。食料を調達するのだろうか。ただの散歩か。……シャロットは、その度何度飛び出してゆこうとしたか知れなかった。しかし、眼を開ければ常に、あの顔が見ているのだった。そうして、自らがいかに不完全であるかを、思い知るのだった。完全でなくては——完全でなくてはならない。一寸の隙も残してはいけない。そうでなければ、そうでなければ——そうでなければ、なんだと言うのだろうか？ どうしてこんなにも不安なのか？ 私は何を恐れているのか。シャロットの脳裏には、これまでまるで考えたことのないような問が、矢継ぎ早に浮かんできた。それは、「何故」という問だった。しかし、彼女にはそれらをどう考えれば良いのかわからなかった。ただそうした問は、四方から飛び来っては、矢のように彼女を刺した。髪を掻き耷り、嗚咽した。壁に懸った作品を筆りとして、引き裂いた。そして息を切らして、再び寝台に臥した。

すると、彼女の内に未知の感覚が噴き出してきた。熱っぽく、体中を這いまわるような感覚だった。いい知れぬ、甘美な衝動が、体内で彼女を突き動かした。度重なる精神

的、身体的変調に、彼女の錯乱は極に達していた。彼女は、訳の分からないまま、衝動に身を捧げた。夕陽が塔の窓を通して、寝台を赤く、染め上げていた。

*

倦怠の内に、シャロットは目覚めた。部屋は暗く、外には星空が敷き詰められていた。シャロットは朦朧とした意識で、寝台からはうように抜け出ると、立ち上がって、機織りの椅子に体を預けた。経験のない倦怠感だった。微かに首を巡らすと、相も変わらずあの鏡があった。しかし、今回は何かがおかしい。鏡に、映る姿が、何か……。瞬間、シャロットは悲鳴を上げかけた。しかし声がかすれて、ほとんど音にならなかった。そこには、化け物のような女がいた。髪は伸びさらばえ、目は赤く充血して、世を捨て、人を呪い暮す魔女のような姿であった。シャロットにはもう、何が起きているのかわからなかった。どれが私なのか？私の顔はどれなのか？怪物を見つめた。相手も見つめた。手を伸ばした。相手も伸ばした。シャロットは、自分の姿を見た時のランスロットの表情を思い出した。あの、苦々しい、困惑したような表情。何かがおかしかった。一度生まれ疑いは、止めどなく広がった。

扉を叩く音がした。シャロットは反射的に、機を織っている風を装った。再び叩く音。シャロットは承認の返事をした。訪問客は、少し戸惑ったようだったが、戸を開いた。「夜分に失礼かとは思いましたが……急ぐことなのです。私もほとんど全快致しました。そこで——。」

シャロットは少し身を震わせた。「私がここにも迷惑になるばかりですから、出発しようと思うのです。朝になると目立ちますから、すぐ行くつもりです。」

シャロットは、自身の手が震えているのを見た。しかし、どうすることもできなかった。

「この三日間のご恩は、決して忘れずまい。どうか——、」ランスロットは少し言い淀んだ。「どうか、城にお越しの時には、私のもとをお訪ねくださるよう。最大限のもてなしをいたしましょう。」

シャロットは、微かに頷いた。「それでは、御暇いたします。」

ランスロットはお辞儀をして、部屋から出ていった。その階段を下ってゆく慌ただしい音が、シャロットの部屋を満たした。シャロットの瞳には涙があふれた。弱々しく立ち上がると、朦朧とする意識の中で、鏡面を見つめた。目をかっと見開くと、三步退った。その時だった。機織り機の糸が宙に舞ったかと思うと、部屋中に飛び散った。鏡面に

は十文字に亀裂が走って、四散した。一瞬のことだった。シャロットは呆然として、その惨状を見つめていた。彼女の脳裏に、あの言葉が響いた。

「顔を…、己の顔を見る時。その時が汝の破滅ぞ、心せよ…。」

この言葉が、絶え間なく脳中に反響して、シャロットを苦しめた。彼女は窓の外、遙かなるキャメロットの城を見た。そうして、言い知れぬ焦慮に駆られながら、覚束ない足取りで戸口へと向かい、倒れかかるようにして戸を開けると、そのまま螺旋階段を降りていった。

あの城へ、その思いが彼女を突き動かした。石の階段に素足が触れ、凍るような冷たさが身を走った。ひた、ひた、という音が、壁を撫でるようにして塔からこぼれ落ちた。吐く息は荒く、視界は涙で滲んでいた。シャロットは瞬間、螺旋の下を覗きこんだ。地上へはまだ遠かった。目眩がして少し後ずさると、調度扉になっていた。シャロットは、自分があの部屋以外に、この塔のことを何も知らなかったことを思い出した。気まぐれに芽生えた好奇心と共に、彼女は扉を開いた。

鏡だった。その部屋中に、鏡が懸かっていた。大小も、経年も様々だった。そして何より、それぞれが違った突然の来訪者の姿を写していた。あるものは一目見て肥満であり、あるものは病的なまでに痩身。またあるものは面長、別のものはまるで逆、という具合であった。それでも彼女には、それが全て自分を写したものである、ということ

了解された。シャロットは、ふらつきながらも立ち上がった。そうして、改めて部屋のぐるりを見回した。鏡、鏡、鏡…。全ての鏡が、自分を見つめている。その自分はどれも、自分ではない。シャロットは震えながら顔を覆って、床にうずくまった。一体、私の顔はどこにあるのだろうか？どれが本当の顔なのだろうか？私はずっと見てきた、あの鏡に写った顔？それを完全にした、縫いとった顔？あるいは…あのお方が消えてしまったから現れた、あの見るもおぞましい…。あるいはそのどれでもなく、この部屋の、無数の鏡に映ったどれか？…。

無数の思いが錯綜し、しかし彼女にはどう考えたらよいか、わからなかった。彼女は疲れきった表情のまま部屋を後にすると、逃げるようにして階段を下っていった。

中庭に出ると、凍るような風が頬を切った。夜だった。中庭はすっかり寂れてしまっている。反して、空の方は大いに賑わっている。シャロットは門に向かった。身に纏った白い衣が、月光を受けて揺らめく。流麗な黒髪が、大理石の輝きを帯びる。シャロットは、光のうちに溶け込んだ。恍惚として、月と星々の宴に入り込んだ。夢見るように、彼女は舞った。その時には、何の情念もなく、月光の羅紗を翻し、くる、くる、くる。しかしまた、ランスロットへの思いまでは消すことができなかった。自分の手を取って共に踊るかの騎士の姿が、絶えず目前に現れた。その茶褐色の瞳は、彼女の眼差しを捉えて離さない。するとまた、彼女は顔のことを考えるのだ。一体あの瞳に、私はどう映っ

ているのだろうか?…あの瞳!あの時あなたは、何を思っ…。他の鏡にどう映ろうと、それがなんだろう。…ただあなた、あなたのその瞳に、…。

気がつく、彼女は門の前に佇んでいた。迷いはなかった。すると、もう幾年月に渡って閉じられたままであったその門が、鈍重な音を立てて開き始めた。乙女は、決然としてそれを見守っていた。門は開かれた。

IV

キャメロットが、川の彼方に聳えている。白衣の女は、その前を塞ぐようにして立った。風が不吉な唸りをあげて、枝垂れ柳は拉げて撓む。一步、二歩、…。女は歩を進めた。一艘の小舟が、纜を着けられて川に浮かんでいた。船には、一人の老いた船頭が、彫像の如く佇んでいた。女はその側に立つと、木から枝を折り取って、舳先に文字を刻んだ。それが済むと、彼女は船に乗り込んだ。迷い無き眼差しを、キャメロットに据えた。そうして、静かに纜を解くと、目を閉じて、身を横たえた。

翁は櫂を繰り始めた。船は微かな波を立て、冬風を切って進んだ。シャロットは歌った。あの歌だった。透き通る調べが、冬枯れの大地に、木々に、空に、吸い込まれて消えていった。翁は漕いだ。表情は微動だにせず。シャロットは、身内から凍っていくよ

うにして、死んでいった。後には歌の調べだけが、風に乗って、くる、くる、くると、冬空を舞った。

急報が、ランスロットの帰還を祝うキャメロットの歓楽を妨げた。川から、翁と死んだ女を乗せた小舟が流れてきた。その様子が、どうもただならぬ、というのであった。好奇心に駆られた民衆と騎士たちは、一同に渡し場へと集まった。その内には、ランスロットの姿もあった。そこには確かに船が泊まっていて、肌も衣も雪のように白い女の亡骸が、横たわり、櫂をもった翁が、物も言わず聳えていた。翁は、何を言われても答えなかった。人々は、女の顔を見るやいなや、十字を切って、恐怖と好奇が入り混じった顔つきで女を眺めた。「まるでこの世のものとは思われないな。…森に住む妖精じゃないだろうか。」「妖精といえば、川向うにはシャロットの鳥があるじゃないか。まさか…。」「この翁は何者だろう。どうも聾らしいが…。」微かな囁きが、人々の内を駆け巡った。シャロットの鳥の言葉を聞いた時、集団の後方で事態を見守っていたランスロットは、霹靂に打たれたように、民衆を押し分けて船に近づいた。そこには、人々の話通りの、人とは思われないような純白さを持った女が、横たわっていた。しかし、それはあの塔で会った化物のような女とは、別人としか思われなかった。その表情は決然として、高潔さを宿していた。ランスロットは、彼女の部屋中に懸かっていた織物を想起した。その姿は、あの作品に生き写しであった。ランスロットは、ほとんど船の中を覗き

こむようにして、女の顔を見た。その時、低い呟きが聞こえた。

「鏡にも様々ある。歪んだもの、ひびの入ったもの、くすんだもの、澄み渡ったもの。…だがどこに、真の鏡などというものがあるだろう。…」

ランスロットは、驚いて翁を見上げた。その表情は、相変わらず石像のようであった。ランスロットは改めてシャロットの方に顔を移そうとした。すると、船の舳先に何か刻まれていることに気づいた。こうあった。

「シャロットの女」

ランスロットは目を見開いて、シャロットの顔を見つめた。ランスロットは初めて、そこに一人の人間を見出すことができた。そうだ。…彼女は妖精でも、化物でもなかった。私には、今こそそれが分かる。ランスロットはふと、空を見上げた。

「この女の顔の、何と美しいことよ。神よ、彼女に慈悲をたれ給え。」

祈りの声が夜空に昇って、冬風と融け合った。

引用

ドミニックルクール

沢崎壮宏、三宅岳史訳 『科学哲学』 文庫クセジュ 白水社

ステファヌ マラルメ

秋山 澄夫訳 『イジチュールまたはエルベノンの狂気』 思潮社

著者 加藤龍彦

2013年 1月 9日 発行

発行人 不破有理

発行所 慶應義塾大学 アーサー王研究会

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151

©2013 KATO, Tatsuhiko Printed in Japan 非売品

